

Title	存在 - 論理的な種：動物たちとともに考えるために(8月30日 三田キャンパス東館6階G-SEC Lab)
Sub Title	Onto-logical species: Thinking with animals
Author	Mohácsi, Gergely
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.14, (2010. 12) ,p.4- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000014-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

存在 — 論理的な種：動物たちとともに考えるために

Onto-logical Species: Thinking with Animals

(8月30日 三田キャンパス東館6階 G-SEC Lab)

8月の最後の月曜日に、文化人類学グループの主催で、2つの新進分野の若手研究者をお招きして研究会が開かれました。動物研究 (animal studies) の先駆的組織とも言える University of California, Santa Cruz から Heather Swanson 氏、また、近年力を注いでいる北欧の科学技術社会論 (Social Studies of Science and Technology, STS) の代表者として、コペンハーゲン大学の社会学者の Anders Blok 博士の発表を聞かせて頂きました。

2人の発表に先立ち、動物と人間の関係を追究したグレゴリー・ベイトソンの思想にみる「論理性」について、グループリーダー宮坂敬造先生が発言しました。その後まず、Swanson氏が、アメリカ及び現在実施中の北海道の鮭ます孵化場でのフィールドワークをもとに、科学技術が介する人間と動物の関係を考察しました (“Differences that make a difference: Distinctions of wildness and practices of doing salmon”)。次いで、Blok博士は、捕鯨問題のグローバルな展開を取り上げ、「非人間的カリスマ性」の新たなアプローチの可能性について概説しました (“How many (super-)whales are we? Notes on the ontological politics of non-human charisma”)。

研究会の後半には、本拠点リーダーの渡辺茂先生に動物実験を

行っている当事者と、また哲学グループの鈴木康則氏に存在論の視点から、科学技術の日常実践における人間と動物の相互関係に関するコメントをいただきました。塾内外からの参加者の積極的な発言による、各分野を乗り越える学際的な議論で、動物を対象にした科学技術が媒介する論理と感性の相関性に光が当てられたと感じました。

(モハーチ・ゲルゲイ)

On August 30 2010, two young scholars invited by the anthropology group presented their work concerning the relationship between humans and animals as mediated through technoscientific practices. Heather Swanson talked about her ongoing research on salmon hatcheries in Hokkaido. Anders Blok discussed the ontological aspects of the so-called ‘whale-wars’ and the role of non-human charisma in it.



バイオサイコシンポジウム

空間学習は「特別」か？——連合学習理論によるラットの空間学習の検討

Is spatial learning “special”? — cue competition in spatial learning

(10月21日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

2010年10月21日、三田キャンパス内で、Durham Universityより神前裕博士をお招きして、第125回バイオサイコシンポジウムが開催された。神前博士は、ラットのオペラント条件づけにおける連合過程の研究にてPhDを取得され、現在はMcGregor博士とともにラットの空間学習に関する研究を、連合学習理論および神経科学の両面から行っている。

今回の発表では、神前博士が長年取り組んでこられた連合学習理論の観点から、空間学習の特殊性についてお話いただいた。前半は、O’Keefe & Nadel (1978) による認知地図理論に始まり、Cheng (1986) のgeometric module仮説など様々な空間学習理論、および、place cellなどの最新の神経学的研究についてご紹介いただいた。また、隠蔽やブロッキングといった学習一般に広く見られる現象を用いて、連合学習理論の立場から空間学習について検討した一連の研究をご紹介いただいた。後半は、神前博士が現在行っておられる、空間内における幾何学情報とランドマーク情報の刺激間競合に関する研究結果を発表していただいた。装置の角の角度情報とランドマークの数や配置の情報との組み合わせによって、どのようにして隠蔽やブロッキングが起こるのか、数理モデルと照らし合わせながら、結果を発表していただいた。

空間学習課題を検討する上で考慮すべき点を、先行研究や理論を用いて丁寧に発表していただき、かつ現在の空間学習の分野におけるホットな話題を、実際に神前博士が行った実験データから解説していただいた。特に空間学習を専門的に研究している者にとっては、これまでの研究例をまとめるとともに、新たな知見に触れる絶好の機会となり、とても充実したシンポジウムとなった。当日は本大学内外より多数の参加者が集い、活発なディスカッションが行われた。

(井上奈緒美)

The 125th bio psycho symposium was held on October 21st at Keio University. Dr. Kousaki, from Durham University, presented his studies of cue competition in spatial learning using associative learning theories.

